

# 「個性調査簿」による児童理解実践の様相

## —昭和初期以前の一次史料の検討—

An Aspect of Pupil Interpretive Practice Using the Assessment Chart of Individuality;  
Consideration of the Primary Documents from Meiji to the early Showa

有本真紀  
ARIMOTO, Maki

【要旨】「個性の尊重」は、現代の教育が取り組むべき重要な課題だとされる。この「個性」は、1880年代に初めて教育学文献に登場した翻訳語であったが、明治期末になると、教師たちは児童の「個性」を調査し、記録するようになった。それが「個性調査簿」である。では、「個性」は、日本の学校教育実践の中でどのようにして見出されるようになったのだろうか。本稿ではそうした関心のもと、明治期から昭和初期にかけて作成、記入された、児童の個人性を記録した学校表簿一次史料の検討を行った。まず、各地で収集した一次史料の記載項目一覧表を作成し、表簿名称、項目や様式の変遷、同一校における表簿の変化を追った。さらに、記入のためのマニュアル、表簿のモノとしての側面、教師による記述の様態を読み解き、表簿の記述という教育実践において児童の個人性をめぐる理解がどのようになされてきたかを考察した。その結果、当初価値的意味を含まない概念として使用されはじめた「個性」が、教育実践の場にすでに存在していた解釈枠組み—「性行」や「操行」の査定—に接ぎ木される形で理解されていく過程が明らかとなった。また、これまで知られてこなかった一次史料に光を当て、貴重なデータとして活用していくための視点を提示した。

キーワード 個性、操行、査定、評価、表簿、児童理解

### 1. 問題の所在

「個性」は、無条件に価値あるものであり、尊重すべきだ—誰もがそのように考えている。とりわけ教育の場においては、「個性の伸長」や「個性尊重」が理念や目標として最重視されるべき事項となっている。本稿の関心は、この「個性」が日本の学校教育実践の中でどのようにして見出されるようになったのか、ということにある。

individualityの訳語として1880年代に教育文献に登場した「個性」は、「もっぱら自然的・生得的な生理的・身体的・心理的差異を表現する言葉」でしかなく、「文化的差異も社会的差異も価値的意味も含まない概念だった」（佐藤 1995：34）とされる。また、必ずしも個人を想定して使われる語ではなく、「日本人の個性」（三沢 1910：98-102）、「男女の個性」（伊藤編 1906：49）などのように、ある属性で括られる集合の性質の意にも用いられた言葉であった。

その「個性」が、「尊重」の語と不可分に結びついた上で国家の教育方針として掲げられたのは、1927（S2）年の文部省訓令二十号「児童生徒ノ個性尊重及職業指導ニ関スル件」（以下「個性調査訓令」と略記）においてである。この訓令は、「児童生徒ノ心身ノ傾向等ニ<sup>くら</sup>ヘテ適切ナル教育ヲ行ヒ更ニ学校卒業後ノ進路ニ関シ青少年ヲシテ其ノ性能ノ適スル所ニ向ハシムルハ……喫緊ノ要務ニ属ス随テ学校ニ在リテハ平素ヨリ児童生徒ノ個性ノ調査ヲ行ヒ其ノ環境ヲモ顧慮シテ實際適切ナル教育ヲ施」すことを求めた（下線引用者）。

この訓令（以下「個性調査訓令」と略記）を受けて、各地の師範学校や自治体、それぞれの学校において新たに「個性調査簿」<sup>1</sup>の様式が定められ、実践された。つまり、この表簿には児童生徒の「心身ノ傾向」「性能」に加え、平素より教師が調査を行った児童生徒の「個性」や「環境」が書きこまれているはずである。後述するように、各地で作成された「個性調査簿」は、心理学や実験教育学の影響を色濃く受けており、非常に多くの項目にわたって児童生徒を多面的に捉えられるよう、綿密に設計されている。したがって、「個性調査簿」を検討することで、昭和初期に教師が児童生徒のどのような面を捉えようとしていたのか、当時の学校において「個性」がどのような内実として調査されていたのかを知ることができる。

ところが、この「個性ノ調査」は、個性調査訓令以後になってはじめて開始されたものではない。片桐によれば、1910年代になると「個性尊重」はすでに「教育界の合い言葉」になっており、「小学校の現場では『個性観察』の重要性が盛んに主張され、これまでの児童訓練のための品性調査録や性行品評録などは、個性観察簿、個性調査簿などと称されて、ほとんどの学校に置かれるようになって」いた（片桐 1995：63）。児童の性質や身体状況、家庭や近隣に関する事項、学業成績、その他個人性にかかわる詳細な情報を集め、記録する学校表簿は、明治期末から大正初期にかけて普及していたのである。前述の個性調査訓令は、まったく新たな実践を導入しようとしたのではなく、すでに普及していた個性調査の実践を職業指導、すなわち職業適性による配分へと結びつけるものであったといえる。

児童の個人性にかかわる情報を記入した表簿の源流をさらに遡るならば、「第一式甲生徒学籍簿」（1881）の「品行性質」欄、若林虎三郎・白井毅による『改正教授術』（1884）の「性質品評表」、1890年ごろからの学校管理法書において盛んに例示された「生徒性質品評表」「人物品評表」などが挙げられる。これらの表簿は、1ページに何名もの生徒姓名<sup>2</sup>を書き連ね、各人につき4～6項目を縦一列に表示するものであり、品評の必要あるごとに記録する「1回記載集合表」の形式を取っていた。それが、一人の生徒の情報を1枚の用紙に記録する「個人表」形式となり、さらには在学期間を通して記録を書き足していく「年次累加個人表」へと変化を遂げることで、一人当たりの項目、情報量は飛躍的に増加した。この移行は、当初は「査定結果の記録」を目的とした児童の性質や品行・操行等に関する表簿が、「平素の行状学業の記録」「道徳訓練上の参考」へと、その目的を移行させたことと連動していた（有本 2012）。つまり、これらの表簿の変遷を追うことで、近代学校が児童をどのように理解しようとしてきたかを読み取ることが可能である。

しかし、こうした表簿について、従来の研究は多くを語ってこなかった。「個性」の語とその概念について言えば、日本における「個性」の登場に関する論争（片桐 1995, 2006, 鶴殿 2001）<sup>3</sup>、「個性化」が国民国家の教育言説となる様相を分析した佐藤（1995）、昭和初年の職業指導言説において「個性」概念が果たした機能を明らかにした広田（2001）など重要な研究が蓄積されてきているが、これらのうち個性調査簿に触れているのは、わずかに前述の片桐（1995）の言及のみである。

一方、このような言説に関する研究ではなく、学校で行われていた個性調査に着目しているのは、明治後期から大正初期の個性教育論を追う中で個性調査を個性教育の実践的展開として捉えた山根（1995）と、フーコーの権力論をもとに個性調査を「表簿を通して生徒を観る」実践であったと位置付けた河野（2003）であった。河野は、個性調査に「調査対象に関する様々な情報が一つの表簿の中でいわば網羅的な集合をなしている点の新しさ」を見出し、各種調査データをまとめた個性調査票が、その様式によって解釈のストーリーを規定していること、余すところなく収集された生徒個人にまつわる情報の総合的な読解をとおしてこそ対象理解が可能だとする認識方法のスタイルの存在を指摘している。表簿の変遷にも注目する河野の研究は、本稿にとっても直接の先行研究となるものだが、分析に使用しているのは心理学者大友茂が1929年に示した「個性調査票」と学籍簿などの様式例であり、実際に学校で教師が記入した表簿ではない。

これに対し有本（2012）は、個性調査簿の成立に至る学校表簿の変遷を、公開された資料だけでなく各地に残る記入済みの学籍簿、人物品評表、個性調査簿等を用いて明らかにした。稲葉（2013）は、一次史料から日常生活者としての教師が表簿の横軸（項目）と縦軸（学年）を記入する行為の意味を読み解いた。そこから、個性調査簿の様式と記録が導く「パターン」を参照し、その都度児童らの「個性」を解釈しながら、その「個性＝らしさ」を語り継ぐ教師の姿を明らかにしている。また、水谷（2014）は、「個性調査簿」および、そこに転記される前の「家庭調査簿」を用いて、家庭が近代教育を受容する様相と近代原理の浸透について考察している。

これらの研究同様、本稿でも一次史料の学校表簿を読み解くことを主眼に進めたい。「個性」が日常的な教育実践の中で、どのような形で見出されるようになったのかを問う本稿の関心に照らせば、教育学関連文献が説いた「個性」の定義や分類、表簿様式の例、個性教育をめざす言説などからではなく、無論それらの影響を色濃く受けながらも、各学校の教師たちが児童に向き合う中で、児童の個人性を記録するためにどういった表簿を作成し、どのように記入していたのかを検討しなくてはならない。それは、「表簿をもって児童の個人性を捉えようとする実践の中でこそ、児童の個人性は見出されるようになった」（有本 2012：23）からであり、さらに言えば、表簿の項目とそこに記入された言葉の集積こそが、「児童という存在を定式化した」（同：19）と考えるからである。そこで本稿では、記入済みの一次史料表簿をその様式だけでなく、教師による記入の様相まで含めて読み解き、表簿の記述という実践の中で児童の個人性をめぐる理解がどのようになされてきたかを明らかにしたい。

## 2. 史料の整理と項目一覧表の作成

こうした問題関心から検討対象とする史料は、明治後期から昭和の初めにかけて各学校で作成されていた、児童生徒の個人性を記録した「個性調査簿」をはじめとする表簿である。これらの

表簿は、明治10年代から存在した「性行簿」や「品評表」から「個性調査簿」への連続性を持ち、さまざまな名称が付されていた。名称だけでなく、表簿の内容・形式にも多様性が見られ、1927年の個性調査訓令以後も、国家レベルで統一された様式が示されたことはない。つまり、地域や学校単位、時期によって異なる表簿が存在していたことになる。

本稿が対象とする表簿は、北海道、東北、関東、中部、近畿、四国の各地方で収集した一次史料である<sup>4</sup>。一部は地域の図書館、資料館等に保管されているが、多くは当時記入されたままほとんど開かれたこともなく小学校に置かれていたものである。この種の文書は公的な保存義務があるわけではなく、学籍簿より嵩があるため処分されたものも多いと推測される。また、戦災や災害で失われたり、校舎建て替えや学校統廃合の際、最近では個人情報保護を理由にした処分が相次いだりして、残っていること自体が貴重な史料と言ってよい。

本稿では、収集した史料のうち、児童個人の性質等を記録する項目を備えた表簿のみを対象とする<sup>5</sup>。この限定では学籍簿も含まれることになるが、1900（M33）年「小学校令施行規則」第八十九条に示された「十号表ノ様式」<sup>6</sup>に準拠した学籍簿は原則として除外した。また、年代的には1927年個性調査訓令の後、最初に改訂された様式までとし、それ以後の表簿は含めていない。これは、個性調査訓令による「個性調査簿」の成立までを区切りとして、表簿様式と記入の様相の変遷を追うためである。

まず、各地の小学校で撮影した16校分の表簿の画像データ<sup>7</sup>を整理し、『『個性調査簿』等一次史料表簿記載項目一覧表』を作成した（79～85頁の表参照）。1校に大量の史料が残っている場合もあるが、同じ様式を1点として数え、同校同一様式の表簿のうち最も古い年度を特定して「年度」欄に記入している。その結果計42点に整理でき、年代の古いものから順に並べた。

一覧表の「所在地」欄には表簿を作成した学校の所在する現在の都道府県名を、「名称」欄には表簿の表紙に書かれた題名を記している。「学籍」欄は、生年月日、入学年月日、住所の情報がそろっているものを「○」とし、そうした情報がないものは「×」として、1～2項目が記載されている場合は追記している。「学業成績」欄には、該当する事項がある場合にその内容と記載方法を示した。科目別成績表形式が多いものの、「最長・最短学科」や概評だけの様式もある。「出席」に関する記載がある場合は、月次集計と年間合計日数との別を示した。欠席の記入方式には、病気と事故の理由を区別するもの、遅参と早帰も記入するものもあり、その情報の有無を付記している。

「身体」の列に「測定・検査」と入っているのは、身長、体重などの測定値の他、脊柱、眼疾、齲歯などの検査結果を、項目を立てて記入している表簿である。これは、「学生生徒児童身体検査規程」（1900文部省令第四号）によって公立学校でも行われるようになった、身体検査の結果を記録したものと思われる。一方、「身体」「体質」とだけあるのは、「壮健」「健康」「少弱」といった単語を記載する形式のもので、自由記述の場合と、その他の項目があるものについては内容がわかるように示した。

「家族・家庭」「児童の性質等に関する項目」は、当該表簿に含まれるすべての項目名を書き出し、下位項目がある場合、〈 〉で括った。「備考」には、集合表と個人表の区別、1回記載と累加記録の区別、累加式の場合は学期ごとまたは学年ごとの記入頻度を示した。また、集合表の場合は1ページ当たりの記載人数、個人表の場合は一人当たりのページ数も示している。

「個性調査簿」等一次史料表簿記載項目一覧表

No.	年度	所在地	名称	学籍	学業成績	出席	身体	家族・家庭	児童の性質等に関する項目	備考
1	1887	青森	人物学力表 (優劣表・成績表・人物学 科検定表)	×	学課等級(最上 等、上等、中等、 下等)、学課評 点または学科 平均点(100点 満点)	×	×	×	人物等級(最上等、上等、中等、下等)、人物 調査点または人物評点(100点満点)	1回記載集合表、等級と点数を記入。1ペー ジに10～13名記載、袋とじ。 人物調査点と学科評点を合算し「総点」 の欄を設けたものもある。「平均を「平均 点」欄に記入し、その得点の高い生徒から 順に並べられている。順に並んでいない ものは、「席次」欄が設けられ、平均点の高 得点順に番号が振られている。
2	1889	青森	人物査定表 (人物学力 表・人物調 査表・優劣 表)	×	×	×	×	×	総点(100点満点)、才幹(30点満点)、品行 (気質、行状に区分し、各35点満点)。品行 (優等と尋常に区別し、「最高点」「優等」「高 点」「尋常」「劣等」等)を記したものもある。	1回記載集合表、点数(と等級)を記入。 1ページに10～13名記載、袋とじ。
3	1889	山形	人物品評表	×	×	×	身体	家長職業	徳性、才幹、言語、行為	1回記載集合表。主に単語(時に短文)を記 入。1ページに10～12名記載、袋とじ。 性質4項目について各25点満点の点数表 記による別冊子(人物査定表)が存在する。
4	1891	山形	学籍簿	○	最長学科、最短 学科、全科得点 平均	×	体質	保護者氏名、族籍、住所、職業、 家庭状況	性行(心情、言語、拳止、動情)、賞罰	全(学年)累加個人表、袋とじ2p。単語記 入。家庭状況は短文で、主に資産と、親の 教育への認識が書かれている。
5	1898	長野	生徒品評録 (生徒 年齢の み)	×	×	×	×	×	性質、智能、動作、言語	1回記載集合表、単語または短文を記入。1 ページに10～12名記載、袋とじ。 一組のみだが、組全体の美態、近視、股体不 自由児について記した「注意報告書」が綴 じこまれている。
6	1898	山形	生徒性行品 評簿(表)	×	×	×	身体	家長職業	性情、才智、言語、概評、	1回記載集合表、単語を記入。1ページに 10～12名記載、袋とじ。
7	1900	山形	学籍簿	○	最長学科、最短 学科、全科得点 平均	×	体質	保護者氏名、族籍、住所、職業、 家庭状況	性行(心情、言語、拳止、動情)、賞罰	全(学年)累加個人表、袋とじ2p。単語記 入。No.4と同じ書式(別の学校)。この学 校では、1901年から十号表学籍簿となる。
8	1900	山形	操行調査簿	○	×	×	身体	保護者氏名、族籍、住所(町名の み)、続柄、家業	性行、智能、言語、概評	全(学年)累加個人表、1p(袋とじ1枚に2 名分)。1回記載集合表を累加個人表に転 用している。「中」「中下」「尋常」な どの語、単語または短文を記入。言語欄を はじめとして、それまでにない具体的な記 述も散見される。

9 1902 長野	児童台帳	○	科目別成績表 (各学期と学年 末の年4回、10 点法、合計、平 均)、認定	○ (月次/ 理由/ 遅早)	身体検査表 1ページ(1学 年2回)の測 定・検査結果 ×(4学年)	保護者氏名、住所、職業、児童ト ノ関係	入学前ノ経歴(自由記述)、備考 操行査察：心性(性質、特別ノ智能)、行為 (言語、動作、勤惰、特別)、総評を各学期末 と学年末の年4回記入。ただし、性質と特 別ノ智能は学期を分けて3学期分通しの 記入欄。	全(学期学年)累加個人表、4p。(学籍、保護 者情報、入学前情報)が1ページ。学業成績、 操行査察、出席は学年ごとに1ページの縦 半分を使い、4学年分で2ページ。身体検 査表が1ページ。操行査察は単語記入。
10 1902 山形	学籍簿	○	科目別成績表 (学年末10点 法)	○ (年間 合計/ 理由)	身体ノ状況 (測定・検査結 果)	保護者氏名、住所、職業、児童ト ノ関係	操行	全(学年)累加個人表、1p。1900年の十号 表学籍簿だが、操行を「善良、爽快、鋭敏、 粗暴」等の単語で表記。翌年度、同じ地域 の他校にも同様のものがあり、学籍簿書 替に伴う措置か。
11 1903 長野	生徒操行 査定簿	×	×	×	×	×	定時査定評語、臨時善行発見、臨時悪行発 見(以上学期ごとの短評)、概括評語(学期 ごと、一等・二等などの等級) 操行略歴(学年ごと)	全(学期学年)累加個人表、2p。短文記 入。マニユアルあり(「定時査定評語ハ個 人性質及動作ニツキテ觀察」とある)。従 来の学年末生徒品評録から学期ごとの査 定に移行。操行略歴欄には、性質情意、智 能知識技(智力、才能、芸能)、動作(行為、 拳止)、言語に関する事項を単語または短 文で記入する。
12 1904 長野	児童操行 査定簿	×	×	×	×	×	項目、様式はNo.11に同じ	マニユアルが変わり、「児童の個性及動作」 に就き左記の評語を参照して之れを定む」 として、「個性」の語が登場。「個性」の例と しては「正直、温和、勤勉、軽薄、狡猾、周密、 執拗、忍耐、活発、鋭敏、遲鈍、沈鬱、剛直の 類」。
13 1904 青森	操行調査簿 生徒操行簿 操行査定簿	×	×	×	×	×	勤勉、清潔、共同・公徳、遵法、善良、親密・ 軽率、敏捷、言語、特別ノ行為(以上目立つ ものに「○」)、評点(10点法)	1回記載集合表、または単年累加(学期)集 合表、1ページに3〜4名記載。マニユアル あり。表簿名称には担任によりバリエー ションがあるが、項目は同一。
14 1906 長野	児童簿	○	科目別成績表 (各学期末10 点法、合計、平 均)、優及落	○ (月次/ 理由/ 遅早)	身体検査(測 定・検査結果) 入学ノ際家庭 へ問合せオク コト：持病、 性癖、精神上 ノ異状、視力 障害(有無)、 聴力障害(有 無)、其他	保護者氏名、住所、職業、児童関 係 家庭：曾祖父母、祖父母、実父 母、養継父母(以上有無)、兄、 姉、弟、妹、雇人、其他(以上各人 数を記入)	操行査察：性質、行為、総評(1学期末に記 入し、変更ヲ認メタル場合ニ於テ各学期末 ニ記入)	全(学期学年)累加個人表、2p。単語記述。 総評は等級。4項目の簡単な注意事項あ り。 家庭欄は「有」「人」が予め印刷されてお り、有る場合はそのまま、ない場合に「有」 を斜線で取消し、人数記入の項目には数 字を入れるだけとなり、記入方法の 工夫が見られる。

15	1907	青森	訓練簿	○	×	×	体格、身長、肥 瘦、特殊的事 項及原因	保護者氏名、家族 状態、近隣風習	感情〈鈍鈍、調不調〉、性質 学友間ノ状態、賞罰訓戒ニ關スル事項 個人的徳性〈忍耐、勤勉、秩序、勇氣、清潔、節 制、儉約〉 社会的徳性〈信実、遵法、礼儀親切〉、評 言語〈正確、明瞭、爽快、其他〉 學止〈溫雅、秩序、活発、其他〉、評 知能〈注意、觀察、想像、理解、判断、推理、概 括、記憶、徳的悟性、応用機智模倣、世才諸 識、興味嫌厭、天稟能才、其他〉、評、総評	単年累加〔「個人的徳性」以降各学明〕個人 表、2p。マニキュアルあり。甲乙丙または単 セルも多く、特に2・3学期は「評」欄しか記 入されていない。表簿様式は大きく変化した ものの、記入はごく簡潔で、教師が様式変 更の趣旨に対応していない印象。知能欄は、 記入されていない。
16	1907	愛媛	人別表	○		○	×	保護者名、続柄、身分、職業、住所	訓練ノ状況：助長スヘキ事項、矯正スヘキ 事項 賞、罰、備考	全（学年）累加個人、2p（表面に学籍、保護 者、成績、出席状況）。マニキュアルあり。 訓練ノ状況は自由記述。
17	1908	長野	児童台帳	○			身体ノ状況 (測定・検査結 果)、入学前発 育ノ要状	職業、児童トノ関係	入学前ノ経歴（自由記述）、備考、 操行査察：心性（性質、特別ノ智能）、行為 〈言語、動作、勤惰、特別〉、総評	全（学期学年）累加個人、2p。単語記述。 No.9と同じ学校、内容も同一だが、高等科 用の様式となっている。
18	1909	山形	児童操行 調査表（簿）	×	×	×	身体	家業	性行、智能、言語、概評	1回記載集合表、No.8と同じ学校、同じ様 式だが、性行・智能・言語の記述がやや詳 細になり、集合表の小さい欄に2行にわ たって書かれている場合が多い。
19	1910	東京	児童観察簿	○		×	体質	家庭ノ状況（自由記述）	品位、性質、心力、才智、習慣、行為、举止、言 語、動情、操行概評（甲乙丙） 注意事項、備考（学年）	単年（学期）累加個人表、1p。単語または 短文記入。家庭ノ状況は詳しく記述され ている。
20	1911	長野	児童台帳	○		○	測定・検査結 果	保護者住所、氏名職業、児童ト ノ関係	操行査定（性質、行為）	全（学年）累加個人表、1p。単語または短 文記入。
21	1911	愛媛	人別表	○		○	×	戸主氏名、保護者氏名 家庭状況：祖父母、実父母、兄 弟、姉妹、其他家族、貧富、職業、 家庭ノ概況及家庭教育	訓練の状況：事実の要領、矯正改良の要領 (自由記述) 褒賞、貯金	全（学年）累加個人、2p（表裏3学年ずつ 記入）。No.16からの様式変更だが、マ ニキュアルは変更されていない。訓練の状 況は、細かい文字で熱心に書かれている。
22	1913	青森	訓練簿	×		×	体質	住所、族籍、保護者名、家族 家庭〈職業、状態、近隣風習〉	性質、言語、举止、智能〈頭著、学業成績〉 (以上単語記入) 行為〈勤勉、勇敢、親切、正直、遵法の各項 目を各学期10点法〉、総点、平均点 備考（自由記述）	単年累加（学期）個人表、1p。性質から智 能は「良」「強」「明」「敏」など漢字一文字 の記入。マニキュアルあり。

23	1915	山形	児童一覧表	○	科目別成績表 (各学期10点 法、合計、通約) 認定	○ (月次/ 理由/ 遅早)	身体	家庭(自由記述)、保護者名、保 護者職業、貧富	操作:判定、評語(上、中ノ上、中、中ノ下、下) 心性:性質、智(心)力、才力、技能、感情、意志 性行:習慣、禁止、言語、行為 備考	単年1回記載個人表(成績は各学期)、1p。
24	1915	茨城	個性調査簿	○	科目別成績表 (年1回甲乙丙 丁式)、操作、通 約	○ (年間 合計)	測定・検査結 果 身体不良ノ状 況、処理、結果	保護者氏名、児童トノ統柄、職 業 家庭ノ状況:祖父、祖母、父母、 兄弟姉妹、同居家族、僕婢、生活 程度、信教 近隣ノ状況:隣家ノ職業ノ種 類、朋友 父母ノ希望:家庭ノ方針、学校 ニ対スル希望	個性:品位、性質、能力、才智、習慣、行為、 禁止、言語、勤惰、学業、長所短所ノ原因、訓 練ノ方法、結果 学校ニ於ケル児童:学習ノ状況、作業、運 動ノ状況、学友ノ信用、影響ノ状況 家庭ニ於ケル児童:学齡前ニ於ケル状況、 家庭作業ノ状況、金銭消費及貯金ノ状況、 嗜好予習復習課外読物、物品取扱方、父兄 其他家族ニ対スル状況 賞罰事項	全(学年)累加個人表、6p。詳細なマニ アルあり。 家庭に関する情報、父母の希望、家庭にお ける児童の項目については、各家庭に対 する質問紙調査(家庭調査)が行われてい たことを示す一次史料あり。 個性、学校ニ於ケル児童、家庭ニ於ケル児 童欄は、短文で書きこまれている。
25	1915	和歌山	児童性行録	× (入学 年月日 のみ)	×	×	身体特ニ記ス ベキ事項	保護者ノ職業、両親ノ有無実繼 父母ノ別	心性特ニ記スベキ事項、言語挙動特ニ記ス ベキ事項、奨励若クハ矯正スベキ事項、同 上ノ方法及効果、概評	全(学年)累加個人表、2p。すべて自由記 述。
26	1916	愛媛	成績考査簿	○	科目別成績表 (各学期及び合 計10点法)	○ (月次/ 理由/ 遅早)	身体之状況 (測定・検査結 果)	保護者之住所氏名	操作之良否:注意観察要項、結果 評語(上、中上、中、中下、下)	単年(学期)累加個人表、1p。注意観察要 項は自由記述。結果は単語を記入。
27	1919	山形	児童一覧表	○	科目別成績表 (各学期10点 法、合計、通約) 認定	○ (月次/ 理由/ 遅早)	身体	家庭(自由記述)、保護者名、保 護者職業、貧富	操作:判定、評語(上、中ノ上、中、中ノ下、下) 心性:性質、智(心)力、才力、技能、感情、意志 性行:習慣、禁止、言語、行為 備考	単年1回記載個人票(成績は各学期)、1p。 No.23と同じ様式だが、詳細なマニアル 「操作判定ノ標準事項」(手書きガリ印刷 り)が綴じこまれている。
28	1921	山形	児童一覧表	○	科目別成績表 (各学期10点 法、合計、平均) 認定	○ (月次/ 理由/ 遅早)	身体(自由記 述)	住所、保護者トノ統柄、保護者 名、職業、貧富 家族(自由記述)	操作判定評語 心性、性行 友達、備考(自由記述)	全(学年)累加個人、2p。印刷された詳細 なマニアル「児童一覧表記入上ノ注意」 (表)「操作判定参考事項」(裏)が綴じこま れている。表簿様式は変化しているが、 後者はNo.27と同じ内容。
29	1921	北海道	成績考査簿	○	科目別成績表 (1・2学期・学 年10点法、総 点、通約)、判定	○ (月次/ 理由/ 遅早)	×	×	操作(優、甲乙丙)	全(学年、成績は学期ごと)累加個人、 2p。短文記入。

30	1921	東京	児童調査簿	○	科目別成績表 (各学期及び学年末10点法、 合計、平均)、 操行、席順	○ (月次/ 理由/ 遅早)	身体(自由記 述)	家庭ノ状況： 保護者名、住所、続柄、職業 祖母、祖父、父、母(各存亡の 別)、兄弟、妹、義妹、同居 (各人数) 宗教、生活程度、教育方針、其 他、備考	入学前ノ経歴 個性ノ傾向：身体、心性、言語、動作、特徴 訓戒、賞罰、事故、其他	全(学年)累加個人表、2p。 「個性ノ傾向」は単語記入。
31	1922	愛媛	人別表	○	科目別成績表 (各学期及び概 評、上中下)	○ (月次/ 理由/ 遅早)	×	家庭状況：祖父母、実父母(有 無)、兄弟、姉妹(人数)、其他家 族、職業、家族状況家庭教育、備 考	操行(上中下) 訓練ノ状況：事実ノ要領、矯正改良ノ要領 (自由記述) 褒状、貯金	全(学年)累加個人表、高等科1p、尋常科 2p。No.21からの軽微な書式変更で、自 由記述欄はかなり小さい。
32	1923	山形	児童一覧表	○	科目別成績表 (各学期10点法、 合計、平均)、 認定	○ (月次/ 理由/ 遅早)	身体(自由記 述)	住所、保護者トノ続柄、保護者 名、職業、貧富 家族(自由記述)	操行判定評語 心性、性行 友達、備考(自由記述)	No.27と同じ様式。途中にマニュアル「個 性観察参考」が綴じこまれているが、これ は昭和に入ってから印刷されたものと思 われる。
33	1924	愛媛	人別調査	○	科目別成績表 (各学期10点法、 平均)	○ (月次/ 理由/ 遅早)	身体(自由記 述)	家庭状況：保護者住所、全職業 氏名続柄、生活程度 家族：祖父、祖母、父、母、兄、姉、 弟、妹、其他、備考 家庭ト学校：家庭訪問、談話会 貯金	操行(上中下) 訓練状況：身体、性質、言語、行動、長所、短所、 其他(以上、要線で区切られていない 自由記述欄) 貯金	全(学年)累加個人表、2p。高等科まで8 学年分の記載欄がある。各学年に家庭訪 問、談話会の記録欄がある。
34	1925	茨城	個性調査簿	× (生年 月日の み)	×	×	身体(自由記 述)	保護者：氏名、住所、職業、児童 トノ関係 家族ノ状況：父母兄弟、生活程 度、周囲ノ状況其ノ他	身体、特性、言語、動作、学科長短、総評 備考 賞罰観察事項、処置	全(学年)累加個人表、2p。p.2は賞罰と 処置が占めている。8学年分の記載欄が ある。どの欄も小さく(特性は他より広 い)、主に単語記入。項目別に表形式をと るマニュアルあり。
35	1925	茨城	個性調査簿	○	×	×	身体ノ状況： 年月日、学年、 身体不良ノ状 況、処理、結果 (測定値や眼 疾耳疾などの 欄なし)	保護者氏名、児童トノ続柄、職 業 家族ノ状況：祖母祖父、父母、 兄弟姉妹×有無継実父母ノ別 同居家族、義妹、資産程度、信教 考(教育程度、嗜好疾病等ノ特 殊ノモノ) (同居家族婢僕ノ欄ニハ人員男 女別記入) 近隣ノ状況：隣家ノ職業、朋友 父兄ノ希望：家庭ノ方針、学校 ニ対スル希望	個性：品位、性質、能力、才智、習慣、行為、 拳止、言語、動情、学業、長短所ノ原因ト認 ムル点、訓練ノ方法、結果 学校ニ於ケル児童：学習ノ状況、作業ノ状 況、運動ノ状況、学友ノ信用、整頓ノ状況 家庭ニ於ケル児童：年齢前ニ於ケル状況、 家庭作業ノ状況、金銭消費貯金ノ状況、嗜 好ヲ復習科外読物、父兄其他家族ニ対スル 状況 賞罰事項、処置	全(学年)累加個人、4p。1915年のNo.24 をベースに、文言の修正とページ数の圧縮 を行ったもの(印刷が和紙から西洋紙へ変 更され、ペン書きすることによるスペース の圧縮もある)。 項目の主な変更点は、学科成績欄がなく なった点、身体ノ状況欄が測定・検査結果 の記入から文章表記になった点、父母の継 実、兄弟の同居別居の別を付加した点。 実際には、書式変更となった当該学年に記 入があるのみで、あまり活用されておら ず、1926年入学者にもNo.34の様式が使 用されていたりする。
36	1925	長野	操行査察簿	○	×	×	×	×	心性：性質、特別ノ智能 行為：動作、動情、言語、特別 総評、備考	全(学年)累加個人、2p。8学年分の記載 欄がある。総評以外、すべて自由記述。

37	1928	山形	児童成績 一覧	○	科目別成績表 (各学期10点法、 合計、平均)認定	○ (月次/ 理由/ 遅早)	×	住所、保護者トノ続柄 保護者氏名、職業、貧富 家族、四圍ノ状況、備考(自由 記述)	操行判定評語 性質行為、其他(自由記述)	全(学年)累加個人表、2p、No.32の様式 からの変更で、「心性、性行、身体」に充て られていたスペースが「性質行為、其他」 に、「友達」欄が「四圍ノ状況」となった。 1935年までこの様式が使われている。
38	1928	奈良	個性調査票	○	学業成績(自由 記述)、成績概評	○ (出席 状況)	身体：発育、 栄養、体質、疾 患(自由記 述)	保護者氏名、続柄、宗教 家庭：職業、生計程度、父母其 他、教育ニ関スル参考事項 (自由記述)	入学前ノ経歴、社会的環境 性行、心性、学業成績、成績概評、出欠状況、 習癖等 入学希望学校、希望職業(本人、家庭) 備考 年月日、重要記事	全(学年)累加個人表、A3判程度の用紙裏 表。裏面は「年月日」と「重要事項」の欄の み。たいへん細かい字で、びっしりと記入さ れている欄と、「全上」とのみ書かれた欄が目 立つ。
39	1928	愛媛	個性観察 指導票	○	科目別成績表 (各学期及び年 間平均10点法)、 平均、操作	○ (月次/ 理由/ 遅早)	身体：外貌、筋 感官異状、筋 力、運動、体 質、食欲、健否 (既往・現 在)、特異ナル 習癖(すべて 単語による)、 身体検査票番 号	保護者氏名、続柄、出産時ノ父 母年齢 家庭：家族数(祖父、祖母、父、 母)、兄弟、姉、妹の有無実数、人 数、各職業 家族健否、生活程度、宗教、主ト シテ嫌ニ当ル者、嫌ノ寛厳、親 ノ嗜好、親ノ趣味 環境：自然風習、交友、其他参 考事項	観察(標徴)の見出しが身体、智能、性行、趣 味、作業、総合に分かれ、さらに以下の欄に 分割されている。 智能：記憶(典型・持続・種別)、注意(範囲・ 強度・持続)、観察(精粗・方面)、思考(速 度・精粗) 性行：気質、言語、行為、性癖 趣味：嗜好、趣味 作業：学習(速度・様式・疲労)、其他 総合：長所、短所 品等、褒賞、其他摘記(精勤・皆勤など) 卒業後ノ希望：区分=進学・就職、希望(第 一・第二)×本人、保護者、教師 年月日、指導並ニ経過	全(学年)累加個人表、A3判程度の用紙 裏表。 4ページに及ぶマニュアル(「個性観察指 導法」=「個性観察並ニ記載方」、「個性指 導方」)あり。「個性指導方」では、4氣質に 応じた教授上、訓練上、養護上、対家庭、適 職に関する取扱が示される他、「精神薄弱 児童ノ取扱」「不良児童ノ取扱」も同じ項 目に分けて詳細に示されている。また、p.4 は「氣質典型表」と「知的素質表」となっ ている。
40	1929	茨城	訓練簿	○	[精神的特徴]の 「作業」の中に、 以下の項目 学科ノ好嫌、好 嫌ノ原因、成績 (平均シテイル 力、優・中・劣、 文・理、 的・技・能、最 優點・最劣点・ 平均点)、其他	×	[身体的特徴] 過去ノ発育： 授乳期間、母 乳其他、既往 歴、歩行開始、 言語開始、其 他 現状：発育概 評、栄養、内臓 ノ強弱、身体 的異常、身長、 体重、胸囲、聴 覚、耳疾、視 覚、眼疾、罹リ 易キ疾病、心 身ノ関係、其 他	保護者：氏名、本籍、現住所、職 業、児童トノ関係 家庭及社会生活(家庭訪問及懇 話要項等)：学年、年月日、自由記 述欄 血統：家柄家風、健康系カ病系 カ、優者劣者ノ有無、其他 家庭：両親(父、母)、同居、別居 ニ處、出産當時ノ年齢、両親ノ 職業、両親ノ趣味性行、兄弟姉 妹(各人数)、祖父母其他同居 者、情愛、宗教、生活状態、教育 ノ理解、其他 社会：周囲ノ状況、交友ノ影響、 通学距離及途上、住所及学校ノ 移動、自然的環境、其他環境ヨリ 受クル影響	全(学年)累加個人表、4p、8学年分の記 載欄。4ページにわたるマニュアル「訓 練簿凡例」あり。 1915年から「個性調査簿」を記入してき た学校だが、1927年訓令後に、表簿形式 とともに名称を「訓練簿」と変更してい る。 「訓練簿凡例」には、「様式ハ甲乙号ノ二種 トシ、甲号ハ日常ノ観察事項及ヒソレヨ リ帰納シテ査定シタル事項ヲ記入シ、乙 号ハ個性観察ノ標準ヲ示シコレニ該当セ ル事項ヲ調査記入スルモノトス」とあり、 甲乙ともに裏表2ページ。甲は縦書きで目 由記述、乙は横書きで数字を記入する項 目が多い。	

41	1931	東京	個性調査簿	×	(生年月日のみ)	科目別成績表 (各学期及び学年10点法合計、平均、操行、順位)	○ (月次理由/遅早)	体力：健康、握力(左/右)、走力(すべて5段階評価)	家庭ノ状況：住所、保護者及続柄、同棲ノ家族(父、祖父、兄弟、母、祖母、姉、妹、僕、同居人の存亡有無または人数)、職業(父母)、生活程度付近ノ状況	智能並特殊能力：一般知能、推理、想像、記憶、観察、注意 感覚運動：巧緻、挙動 情意素質：人柄、快活性、自治心、親切心、従順性、正直、社交性、統率能、共同性、責任感、意力、清潔、作法 言語其他：寡黙、言葉遣、弁舌、言語明瞭、容姿(以上5段階評価) 以下自由記述欄：性癖(盗、虚言等)、趣味(読書、運動等)将来ノ希望：保護者、本人それぞれノ希望先、理由を学校と職業別に教師ノ意見、処置及経過	全(学年)累加個人表、2p。様式は、東京市役所の定めたもので、「個性調査表記入手引」(東京市役所1930)に従って記入されたと思われる。文字記入する部分は少なく、個性調査部分は5段階評価し、マトリックスの該当箇所に○を記入する。
42	1936	山形	個性調査簿	○		×	×	身体ノ状況：發育、榮養、体力(走力、跳力、投力、懸垂、握力、一般疲労)、疾病異常	保護者：氏名、住所、職業、児童トノ關係 環境：家系(名家・普通、優秀者有無、劣等者有無、健康系・普通系・虚弱系)、生活程度(高・普・低)、家族(祖父、祖母、父母=実養親、其他、召使)、教育担当者、愛情、躾方、家族教育程度、家族生活(習慣、習癖、食事)、学習状況、兄弟關係、遊戯等、備考、社会的環境(交友、場所)、自然的環境	知的方面：注意、観察、記憶、想像、推理(以上強・普・弱)、一般的素質(学年、指数、施行年月日、使用テスト) 学業傾向(学年、文科、理科、技能科)、学科ノ好惡、学習態度 情の方面：快・普・不快、強・普・弱、速・普・遅、一時的・普・永続的 喜怒哀、愛情、同情、悲(以上強・普・弱)、知的興味、美的興味、道德的興味、其ノ他 意的方面：思慮(熟慮・普・輕率)、決行(断行・普・躊躇)、執意(堅固・普・弱)、自制(強・普・弱)、強、弱、本能的行動、變化 長所短所、變化 言葉、禁止、變化 職業指導：教師ノ所見、家族及本人ノ希望活動記録並ニ處理(学年、年月日、事項及處理指導)	1927年訓令後初めて、「児童成蹟一覧」から全面改訂。全(学年)累加個人表、4p。項目は多いものの、該当する言葉や尺度に○をつける箇所が多く、言葉による記入箇所は少ない。 (山形県では、1932年2月8日に号外学務部長通牒として、各学校長宛に「児童調査票様式ニ關スル件」を発している。この通牒に別記された「児童調査要項」が参照された可能性が高い)

### 3. 一覧表からの考察

一覧表にすることで、年代を通した項目等の比較が可能となったが、この42件をもって十分な件数と断言はできないだろうし、同じ年代でも地域や学校による差も大きく、これを全国的に共通した変化として捉えることは性急に過ぎるかもしれない。しかし、所在を探り当てることが困難な一次史料をこれだけ収集した例は他にないことから、さしあたり現在手元にある史料の範囲で言い得ることを指摘しておきたい。

まず、表簿の名称だが、「優劣」「検定」「品評」「査定」といった言葉は1900年に入るところまでしか使われず、「学力」「人物」「性行」などの語の使用も早い時期に限定されている。「人物学力」「人物学科」のように結びついているのは、1887（M20）年の文部省訓令第十一号が「学力ト人物トヲ査定」し、卒業の際「証明ヲ授与セシムヘシ」定めたことによる。

1900年代に入った後は、「調査」「考査」「観察」「査察」といった言葉が使われるようになり、表簿名称の上では優劣や等級の決定、裁定を下すというニュアンスから、調べることへと主眼が移行している。同じころ、「優劣」や「品評」に代わって「成績」「操行」、さらには「個性」が現れてくる。これには、1900年（M33）の小学校令施行規則第二十三条が「小学校ニ於テ各学年ノ課程ノ修了若クハ全学年ノ卒業ヲ認ムルニハ別ニ試験ヲ用フルコトナク児童素素ノ成績ヲ考査シテ之ヲ定ムヘシ」と規定したことが影響している<sup>8</sup>。また、「操行」への移行は、前述した1900年の十号表様式学籍簿に「操行」欄が設けられたことによる。学籍簿に操行点を記入するために、その原簿となる表簿が必要となったからであろう。なお、一覧表中に最も早く「個性」を含む表簿名称が現れるのは1915年である。

他に名称の中で注意を引くのは、1900年代に入ってから現れてくる「台帳」「児童簿」「人別表」「一覧表」の語である。これは、人物や操行のように記載内容を特定するのではなく、一人の児童に関する情報を網羅した表簿をめざした名称と解される。実際、こうした名称の表簿は操行査定簿のような名称の表簿に対して記載項目が多く、一覧表中にも「×」はほとんど見られない。

このように、児童個人の情報を網羅的に記録する表簿の必要性が広く認識されるようになったのは、「小学校教則大綱ノ件説明」中の「学事表簿様式制定ノ事」に端を発していると思われる。同説明には、「教授上ニ関スル記述ノ外ニ各児童ノ心性、行為、言語、習慣、偏癖等ヲ記載シ道徳訓練上ノ参考ニ供」（文部省普通学務局 1891：54）することが示されており、それ以後一人の児童に関する詳細な情報を収集記録することが道徳訓練上有効とする認識が次第に浸透したことを反映している。

「学籍」にかかわる項目は、ここでは生年月日、入学年月日、住所の情報がそろっているものを「○」としたが、各学校は一覧表に挙げた表簿の他に必ず学籍簿を作成していたにもかかわらず、1906年以降のほとんどの表簿に上記の情報が記載されている。これについては、「学業成績」「出席」「身体」についても同じような状況がある。成績表、出席簿、身体検査表は、それぞれ専用の表簿が作成されていたはずだが、個性調査簿等にも改めて情報が転記されていることが少なくない。ここからも、個性調査簿等がいかに児童の情報を一表の中に網羅しようとしたかがわかる。教師の手間を増やしてまで他の表簿の情報を転記したのは、児童に関するあらゆる情報を「一目瞭然一表」にまとめようとする意図からであった（有本 2012：17-18）。

「家族・家庭」「児童の性質等に関する項目」については、一覧表を一瞥しただけで年代が新し

くなるほど項目が増えていることが読み取れる。前者については、保護者氏名、族籍、住所、職業、児童との関係といった学籍にかかわる項目を超えて、祖父母や兄弟、僕婢を含めた家族構成、生活程度、宗教、隣近所の職業、近隣の風習などが記載されるようになる。さらには、出生時の親の年齢、親の嗜好、趣味、教育程度、家系内の優等劣等者の有無、父兄談話会への出席状況、家庭の教育方針や学校に対する希望までが調べ上げられていく。

この理由もまた、「小学校教則大綱ノ件説明」の前述した部分に続いて「学校ト家庭ト気脉ヲ通スルノ方法ヲ設ケ相提携シテ児童教育ノ功ヲ奏センコトヲ望ム」（文部省普通学務局 1891：54）とされたことに端を発する。学校教育に関心をもちたない家庭が多い中、学校は通知表、懇話会、家庭訪問といったさまざまな方法を設けて家庭との接近を図ってきたが、学校教育の実を挙げるには、家庭への通知や保護者との懇話だけでなく、家庭の状況を詳しく知る必要が意識されるようになる。特に、1900年を過ぎると、家庭の事情を観察調査して訓戒矯正の方法に生かすとの主張や（三輪 1900：57）、児童の発達を助けるために個人の天稟性質と周囲の境遇、すなわち家庭の状況を研究すべき（根岸 1902：74）との提唱がなされる。さらに、「児童の個性の因て来る所は、家庭の情況に大いに関係」し、性質は「家庭の情況遺伝的稟性を異にするに因」（池上 1905：24）とされ、児童の個性の原因たる家庭を知ることが不可欠だと考えられるようになったのが、家庭に関する項目増加の理由である（有本 2014）。

「児童の性質等に関する項目」も年代を下るほど数が増え詳細になっているが、その内訳を見ると全期間を通じて使われた言葉と、使用時期が限定されている言葉がある。例えば「言語」「挙止」「行為」「性行」「性質」「智能（知能）」は、年代を問わず多くの表簿に採用されている。一方、「行状」「才幹」「心情」「性情」の語は1900年以前に限られており、逆に「操行」は1900年以降に現れる。「観察」「記憶」「作業」「想像」「注意」といった学習上の心的作用に関わる項目、「長所短所」や「学友（友人・友達）」に関する項目、「嗜好」「習慣」なども1910年前後になって見られるようになる。現在の児童の様子を記録するだけでなく、その方法や結果を含む「訓練ノ状況」「入学（学齢）前ノ経歴」といった時間経過を伴う項目、過去に関する項目も同じころから記録されていく。さらに1927年個性調査訓令以降の表簿には、それまでに見られなかった「趣味」「情意」「推理」なども加わり、進路の希望も本人だけでなく、保護者の希望、教師の希望を含めて記入されるようになるのである。

もう一点、一覧表の備考欄に記載した表簿形式に注目すると、早い時期にはほとんどが1ページに数名分の情報をその都度記載する「1回記載集合表」であったのに対し、1900年代に入ると累加個人表が主流を占める。しかも、各学期を累加して1年間で完結する様式はわずかで、ほとんどが在学期間全体にわたる累加記録となっている。

以上を考え合わせれば、1910年代には個性調査簿がそれまでの品性調査録や性行品評録などに取って代わり普及していたという片桐（1995：63）の見方は、実態に即して修正する必要があるだろう。個性調査簿は、①1880年代末に始まる人物品評表の類を前史とし、②1900年代から1910年代に児童に関する情報を網羅する台帳として新たな形式に整備され、③さらに1927年の個性調査訓令を受けて再編されるという、2段階の変化を経ながら作成、記入されてきた表簿だといえる。次ページ図1～3に、第1期から第3期それぞれの特徴的な表簿の画像を示す。

自明治二十二年三月廿八日 高等科第四學級第四學年

生徒性行品評表

姓名	性	行	品	評
佐々木 三郎	男	誠實	勤勉	優
佐々木 健一	男	誠實	勤勉	優
佐々木 健二	男	誠實	勤勉	優
佐々木 健三	男	誠實	勤勉	優
佐々木 健四	男	誠實	勤勉	優
佐々木 健五	男	誠實	勤勉	優
佐々木 健六	男	誠實	勤勉	優
佐々木 健七	男	誠實	勤勉	優
佐々木 健八	男	誠實	勤勉	優
佐々木 健九	男	誠實	勤勉	優
佐々木 健十	男	誠實	勤勉	優
佐々木 健十一	男	誠實	勤勉	優
佐々木 健十二	男	誠實	勤勉	優
佐々木 健十三	男	誠實	勤勉	優
佐々木 健十四	男	誠實	勤勉	優
佐々木 健十五	男	誠實	勤勉	優
佐々木 健十六	男	誠實	勤勉	優
佐々木 健十七	男	誠實	勤勉	優
佐々木 健十八	男	誠實	勤勉	優
佐々木 健十九	男	誠實	勤勉	優
佐々木 健二十	男	誠實	勤勉	優

図1 1898年作成「生徒性行品評表」(史料番号6)

児童の個性調査簿

姓名	性別	生年月日	学年	身長	体重	頭圍	胸圍	視力	聴力	言語	算術	理科	社会	体育	音楽	美術	その他
佐々木 三郎	男	明治二十二年三月廿八日	四年	125	25	50	70	1.0	1.0	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通

図2-1 1915年作成「個性調査簿」(史料番号24)

児童の個性調査簿

姓名	性別	生年月日	学年	身長	体重	頭圍	胸圍	視力	聴力	言語	算術	理科	社会	体育	音楽	美術	その他
佐々木 三郎	男	明治二十二年三月廿八日	四年	125	25	50	70	1.0	1.0	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通

児童の個性調査簿

姓名	性別	生年月日	学年	身長	体重	頭圍	胸圍	視力	聴力	言語	算術	理科	社会	体育	音楽	美術	その他
佐々木 三郎	男	明治二十二年三月廿八日	四年	125	25	50	70	1.0	1.0	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通

図2-2 1915年作成「個性調査簿」(史料番号24) 続き (この後にも賞罰事項欄が続き一人分6ページ)

個性観察指導票

姓名	性別	生年月日	学年	身長	体重	頭圍	胸圍	視力	聴力	言語	算術	理科	社会	体育	音楽	美術	その他
佐々木 三郎	男	明治二十二年三月廿八日	四年	125	25	50	70	1.0	1.0	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通	普通

図3 1928年作成「個性観察指導票」表面 (史料番号39)

#### 4. 同一校における表簿の変化

こうした変化が一校の中でどのように進んだのか、表簿の変遷をそれぞれの学校の視点から捉えたい。前述の3期区分のうち、2期以上にまたがって一次史料群が存在する小学校は、6校ある。その内訳は、史料番号1・2・13・15・22の青森県内の学校、3・6・8・18・23・27・28・32・37・42の山形県内の学校、24・34・35・40の茨城県内の学校、5・11・12・14の長野県内の学校、16・21・31・33・39の愛媛県内の学校、30・41の東京都内の学校で、偶然だが各都県1校ということになる。

青森県の学校では、1887年〔史料番号1、以下同様〕に人物と学科評点をそれぞれ100点満点で評定していたが、1889年〔2〕には人物を「才幹、気質、行状」の3項目に分割して査定を行っている。1904年〔13〕には操行調査となり、項目数は9に増えた。ここまでは集合表であったが、1907年〔15〕からは累加個人表となり、学籍、身体、家庭に関する情報を備えた50以上もの項目からなる2ページの「訓練簿」を作成している。1913年に再編成された「訓練簿」〔22〕では15項目へと削られたものの、一人分1年間の記録を1ページで見通せる構成となっている。

山形県の学校には、3期にわたる10種類の表簿形式が残っている。この学校では、1889年〔3〕から1909年作成の表簿〔18〕までは、5項目から成る集合表であった。大きな変化は1915年の「児童一覧表」〔23〕で、学籍情報、成績表、出席状況、家庭状況欄を備え、1回記載ながら個人表の体裁を取っている。1921年〔28〕には在籍期間を通して記入する累加個人表となり、1928年〔37〕の軽微な変更を経て1935年まで使われた後、1936年に個性調査訓令を反映した「個性調査簿」〔42〕として全面改訂されている。

茨城県の学校には1期に該当する史料がなく、1915年の「個性調査簿」〔24〕が最も古い。それが一人分6ページからなる図2であり、この種の表簿中、全国的に見ても群を抜いて情報量の多い表簿である。1925年には一時的に簡潔な別様式〔34〕が現れるものの、同年には以前とほぼ同内容の表簿〔35〕も作成されており、1929年に新様式〔40〕として再編される。他の例と違い、もともと「個性調査簿」であった名称が個性調査訓令後に「訓練簿」と変更されているのは興味深い。

長野県の学校は、1898年には4項目からなる集合表の「品評録」〔6〕を記入していたが、1903年と翌年の「操行査定簿」〔11、12〕では累加個人表となり、定時査定その他、臨時に発見した善行と悪行を記載する表簿となっている。1906年に編成された「児童簿」〔14〕は一覧表のすべての項目を備えており、入学の際持病や異状を家庭に確認して記入する欄と家族構成欄には、「有」「無」の印字のいずれかに取消線を付したり、数字のみ記入するなど、詳細な情報を記入するための合理化が図られている。

愛媛県の学校には、1907年の「人別表」〔16〕から戦後まで切れ目なく史料が存在する。「人別表」は、宗門人別帳を連想させる名称だが、ここでは個人別表の意味であろう。身体にかかわる事項は含まれず、性質については細かい項目を立てるのではなく、助長すべき事項と矯正すべき事項を自由記述する様式となっている。1911年の様式〔21〕は、軽微な変更だが家庭状況が詳細になった他、学校貯金の金額欄が新設された。1922年〔31〕には自由記述欄が小さくなったのみで、1924年に「人別調査」〔33〕と名称が変わる。新しい様式では、身体に関する自由記述欄ができ、家庭訪問や談話会の出席情報も記入するようになっている。従来の「助長、矯正

(事実、矯正改良)」の区分ではなく、罫線で細かく区切っていないが、項目を挙げて記入する様式となった。個性調査訓令を受けた1928年の再編〔39〕では「個性観察指導票」と名称が変わり、A3程度の大判の用紙裏表に6年間の情報を埋めていく様式である。図3では細かいところまで読み取れないが、一覧表の情報を参照すれば項目の多さが理解できる。

東京市域の学校史料では、1921年の「児童調査簿」〔30〕と1931年の「個性調査簿」〔41〕を比較することができる。前者も「個性ノ傾向」として5項目を立てており、「家庭ノ状況」の項目も多いが、後者の項目は非常に細かくなり、例えば「智能並特殊能力」を「一般知能、推理、想像、記憶、観察、注意」として捉えるなど分析的である。この様式は東京市が一律に定めたもので、各学校は『個性調査表記入手引』（東京市役所 1930）に従って記入した。

これら同一校の表簿を並べてみると、いつ、どの表簿からどの様式へ移行したのかが明確にわかる。学年累加の途中で様式が変更された場合、旧様式に途中の学年まで記載され、新様式にその次の学年から記載されているからである。

こうした具体的な移行を通して3期の変化を比べると、第2期から第3期への変化よりも第1期から第2期への変化のほうが大きい。「査定結果の記録」を目的とした第1期と、「平素の行状学業の記録」「道徳訓練上の参考」を目的とした第2期との違いは、表簿の記入を通して児童を理解しようとする観念の有無によると思われる。その点では、項目の増加、表簿の精緻化、心理学的知見の援用といった変化はあるものの、第2期と第3期との間には断絶より連続性のほうが強く読み取れる。

## 5. マニュアルからの考察

東京市は個性調査簿様式を定めただけでなく手引きを発行していたことを述べたが<sup>9</sup>、一次史料の中には当該表簿記入のためのマニュアルと一緒に綴じこんだものも少なくない。東京市のように、別冊として単独の冊子として発刊されていたり、表簿と一緒に綴じられていないマニュアルも存在する可能性があるため、数えることにさほどの意味はないが、第2期と第3期の表簿全33点（史料番号9および11以降）のうち15点にマニュアルが綴じこまれていた。

さて、現代の日常生活においては、ほとんどの製品にマニュアルや注意書が付されているが、それを熱心に読むことはあまりない。しかし、これらの表簿に綴じこまれたマニュアルは、教師の記入に際してかなりの度合いで参照されたと考えられる。というのも、多くのマニュアルにはその項目をどのような観点から記入すべきかといった説明に加えて、セルに記入すべき「言葉のカタログ」（有本 2012）が載っており、表簿に記入された言葉はカタログに示された言葉と一致するものが多いからである。カタログがある場合、教師はそこから言葉を選んで記入したと考えるのが自然だろう。

マニュアルは、一次史料を見る上でも重要な情報となる。記入された表簿だけではわからない表簿の目的や記入上の注意を知ること、教師がどのように記入することを期待されていたかが推測可能になるからである。以下、マニュアルの具体例を挙げながら内容を押さえない。

一覧表史料番号11番（1903）の表簿は、定時査定、臨時善行、悪行の記入欄があるものの、この項目名だけでは記入すべき内容と基準が不明である。それを補うのが、以下のマニュアルである。

### 【操行査定簿記入要領】

- 一 常時査定評語ハ個人性質及動作ニツキテ觀察シテ其評語ヲ下スモノトス
  - 二 臨時善行ハ共同生活上（社交）有益ノ行為又ハ友愛正義等（道德）ニ関スル行状ニシテ表彰スベキ事実アルモノトス
  - 三 臨時悪行ハ凶暴若クハ不良ノ行為又ハ黨ヲ作り尊長朋友間ノ安寧秩序ヲ妨害スル事実アルモノトス
  - 四 概括評語ハ前記事項ヲ参照シ常時性質ノ傾向及動作並臨時ノ善行行為ニヨリ一等二等三等ノ差等評語ヲ下スモノトス
  - 五 操行略歴欄ハ就学前若シクハ前学年ニ比シテ改良ノ点又ハ学級担任教員外ノ批評賞罰等ニ関スル事項ヲ記シ別ニ同欄内ニ備考欄ヲ設ケ智能言語ニ関スル認定評語ヲ記入スルモノトス
- 附記 一 同学年ニ二ケ年間修学スル生徒ノ標語ハ同欄内ニ異同ヲ併記スルモノトス  
二 此記入要領ハ各学級査定簿表紙ノ裏面ニ記載シ置クモノトス  
三 従来施行シタル学年末生徒品評録ハ右実施ノ日ヨリ廃止ス

附記二にあるように、このマニュアルは各級査定簿綴表紙裏面に担任が筆で手書きしており、その都度の筆写であったためか時折微妙に表現が異なる。つまり、この学校の教師たちは、まずこの要領を筆写してから表簿の記入に取り組んだと想像される。附記三からは、従来の生徒品評録がこの「操行査定簿」に代わったことも明らかであり、附記に続いて次の言葉のカタログも並んでいる。

- 一、性質情意ニ関スルコト、  
正直、温厚、僕実、従順、浮薄、狡猾、周密、疎略、柔和、執拗、忍耐、活発、鋭敏、  
遅鈍、沈鬱、<sup>ママ</sup>循良、剛直ノ類
- 二、智能 知識技能ニ関スルコト  
（智力）想像力ニ富ム、概括力ニ乏シ、觀察力ニ鈍シ、思考力ニ強シ、記憶力ニ富ム  
（才能）応用力ニ長ス、機智ニ富ム、能ク事ヲ弁ズ、世オニ乏シ  
（芸能）画ヲ能クス、唱歌ニタクナリ、文オアリ、模倣ニ巧ミナリ
- 三、動作。（行為）、人ヲ凌グ、人ト争フ、約ニ背ク、世話ヲ好ム、能ク人ト交ル。  
（举止）静肅、軽捷、温雅、粗暴、不整、
- 四、言語、明亮、爽快、高声、不明、少訥、急調、洪滞

教師は、一人一人の児童、その都度の振る舞いに接して、それを表簿に記入すべきかどうかを判断し、どのように記入するかを考えることになる。児童の振る舞いは上記に当てはまるものばかりではなく、「他人ノ騒キ乱ルハアルモ独謹然」「他人ノ頭ヲ下駄デナグリタルヲアリ」といった具体的な行いも記述されるが、それは「操行査定簿記入要領」の二と三の基準に照らして選択され記述された行為である。また、特に定時査定評語は、「鋭敏ニシテ活発ナリ」「稍遅鈍ニシテ不整ナリ」「思考力ニ乏シ」「温順ニシテ世話ヲ好ム」など、言葉のカタログから選択、組合せ、変形がなされて記入されている。このようにマニュアルと表簿を照合することで、教師のマニ

アル遵守／逸脱（工夫）の状況も見えてくる。

前掲記入要領第一項にあった「個人性質」は、同校翌年の表簿〔12〕記入要領では「個性」の語に変化しているが、記入に際しては「左記の評を参照して之れを定む」として、「正直、温和、僕実、軽薄、狡猾、周密、執拗、忍耐、活発、鋭敏、遲鈍、沈鬱、剛直の類（以上個性）」とされ、前年要領の「性質情意」の内容をほぼ踏襲している。つまりこの時点で教師が把握しようとした児童の「個性」は、従来「性質」として査定してきたものと大きく変わらない形で理解されていたと考えられる。

13番の表簿（1904）に付された「生徒操行調査法」は、例えば「温良」は「故意ニ敬礼ヲ欠キ或ハ顔色容貌等ニ顯ハスヲナキヤ否ヤ」のように、9項目それぞれについて教師が判断するための具体的な行為のみが示されている。一方、14番の「児童簿」（1906）には、「児童簿ハ児童ノ生年月日順ニ綴リオクベシ」「操行査察欄ノ第一期末ニ於テ記入シ変更ヲ認メタル場合ニ於テ各学期末ニ記入ルモノトス但総評ハ每期附スルモノトス」など、表簿の綴り方と記入時期についての4項目の注意のみが表簿用紙自体に印字されている。これらは簡潔なマニュアルの例である。15番（1907）の「訓練簿記載方説明」も、それぞれの項目に何を記入するかを示しただけの簡潔なものだが、備考に「訓練簿ハ職員外ノ人ニハ見セシムベカラズ」と明記されている。これに類する注意は他のマニュアルでも散見され、これらの表簿は当該校の教師だけがアクセスできる情報として記録されていたことが確認できる。

16番（1907）と21番（1911）の「凡例」は同一で、楷書体で記入する、身分職業欄は家長のそれを記入する、成績欄は上中下とし前学期と差がある場合はその原因を記すなど、16項目の注意が挙がっている。そのうち、「勤否欄ハ毎月末出席簿ヨリ転載スル」「訓練ノ状況ハ毎年度末ニ於テ自己ノ携帯スル訓練簿ニヨリ此ヲ概括シテ記入」などの注意からは、当該表簿と他表簿との関係が推測される。同様に、22番（1913）の「訓練簿ニ関スル注意」には、「本簿ヨリ成績通告簿ニ移スニハ甲乙丙丁ヲ以テス」と定められている。教師は、月末、学期末、年度末といった時期に他の表簿から、あるいは他の表簿様式への情報の転記を行っており、当該表簿はそのたびに参照されていたことがわかる。

24番（1915）の「個性調査説明」は、それまでのマニュアルとは詳細さの度合いにおいて画期的である。表簿（図2）の体裁からして、それに見合う説明を必要とすることは理解できるが、この手書き謄写版4ページにおよぶマニュアル冒頭には表簿の目的が次のように明記されている。

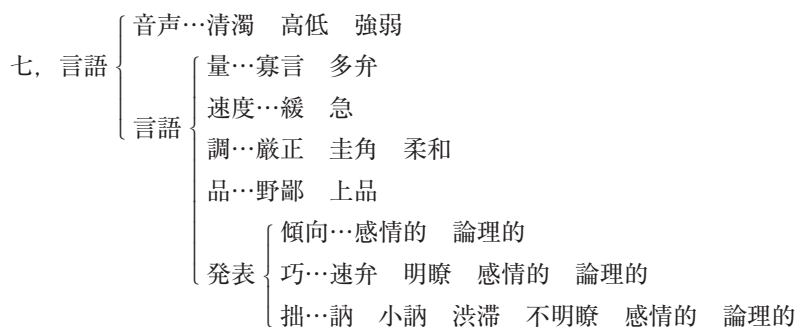
- 一、本校ニ於テハ児童教育ノ効果ヲ有効ナラシメンガ為メ児童各自ノ個性ヲ調査シ其長ノ發揮短所ノ矯正ヲ計ルモノトス
- 二、本校ニ於テハ別紙様式ノ帳簿ヲ備ヘ各担任訓練ハ受持児童ノ個性ヲ調査記入シ教授訓練ノ資ニ供スルモノトス（下線は引用者）

この「別紙様式ノ帳簿」がすなわち「個性調査簿」（図2）であり、名称からすればすべての項目の総体が「個性」と捉えられるのであろうが、表簿中には「個性」の大項目があり、その内訳は以下のように説明されている。「個性」の内訳は全13項目（一覧表参照）あるが、ここでは説明のあり方を例示するため、最初の3項目のみ引用する。

- イ、品位 容儀端正又ハ乱雑、威重、軽薄、高尚、野卑等
- ロ、性質 従順、傲慢、正直、沈着、剛毅、懦弱、狡猾、誠実、質朴、薄情、硬直、健俊、快闊、頑固、謙遜、陰險、執拗、綿密、熟慮、遠慮、勇氣、同情、愛情、小諳、権勢、名誉心強シ、利己心強シ等
- ハ、能力 注意深シ、観察力鋭敏、想像力ニ富ム、記憶力強シ、意志強固、思考力強シ、理解力乏シ、決断力ニ富ム、能ク判断ス等

ここでもやはり、「個性」の中身は従来「性質」として査定してきた内容を細分化し、言葉のカタログとして示したものといえる。選択される言葉は、現代から見れば児童の性質を表すのに不適切と思われる語が多く混じっているが、「狡猾」「陰險」「執拗」などの語も実際の表簿に多く記載されており、当時の教師たちには個性を良いものとして尊重するという観念は希薄であったと思われる。

27番（1919）の「操行判定ノ標準事項」も精緻化されたマニュアルであり、各項目が例えば下のように、樹状図に似た示し方となっている。



このような形で分析的に示された、全8項目からなる手書きガリ版刷り2ページの言葉のカタログは、28番（1921）では同じ内容が活字組1ページとなり、その裏面に「児童一覧表記入上ノ注意」が加えられた。この注意も22項目にわたり、「身体方面ハ強健薄弱等ノミナラズ個性ニ影響ヲ与フル著シキ事項ヲ具体的ニ記ス」という注意からは、身体的特徴にも「個性」の原因を見出そうとする姿勢が読み取れる。

32番（1923）にも同様の注意が綴じこまれているが、表現には軽微な変更が加えられ、表面は「個性調査説明」から新たな「個性観察参考」へと変更された。ただし、これは昭和期に入ってから印刷されたものと推測され、大正12年入学児童の表簿を累加していく過程で綴じこまれたものであろう。基本的には27番のマニュアルを踏襲した言葉のカタログ形式を採っているものの、「遺伝ニヨル先天的特質、感化教育等ニヨル後天的性質並氣質ノ典型的ノモノ特ニ悖徳性性格欠陥（神経症、癲癇症、変質症）ノ著シキモノ記入」といった説明が加えられている。「個性観察簿」は指導のために家庭状況を把握するだけでなく、社会防衛的な意図も透けて見える<sup>10</sup>。

これらのマニュアルを見れば、フーコーの次の言葉が強い実感として受け取れよう。「規律・訓練を受ける個人性についての一連の記号体系がすっかり形成されるのであり、その体系のおかげで試験によって確定される個人別の特色が同質化されつつ書き取られるのである」（Foucault

訳書1977：192)。本簿のマニュアルは記入者に一連の記号体系を教育し、児童を見る同質化された目と、その書き取り方を伝授するのである。

個性調査訓令後の表簿である39番から42番の表簿には、それぞれマニュアルが存在する。東京市の手引は特別な例といえるだろうが、いずれも2ページないし4ページの表簿を記入するためのマニュアルとして不似合ではないかと思うほど膨大で充実している。「個性調査簿」は、それほどに説明を尽くさなければ教師の理解が及ばないということだったのか。

この点は表簿の記述との関係で後に再度言及することとし、ここではマニュアルが表簿記入のためだけではなく、記入後の指導指針の役割をも志向するようになったことを、39番の「個性観察指導法」(1928)によって指摘しておきたい。この資料はA4判4ページを2段組の細かな活字と、表組みが埋めている。明治30年代以降の教育学文献が繰り返し述べてきたように、このマニュアルでも「個性」は多血質、神経質、粘液質、胆汁質の4気質に分類されており、「気質典型表」がその判断を助けるようになっている。その上で、例えば「多血質児童ノ取扱」は次のように示される。

教授上	言語共同ヲ沈省ニ且ツ正確ナラシメ、要領ヲ把持セシムルコトニ務ム。
訓練上	真善美ニ対スル情操ノ養成ニ務メ、義務ノ遂行、持続ノ習慣ヲ養フ。
養護上	呼吸、食欲、運動ノ調整ニ注意ス。
対家庭	質実ナル生活ヲナスベク注意ス。
適職	保険会社勧誘員、外交官、落語家、小売商人、活動弁士、囃方、模造品製造等。

この他にも、病的児童、精神薄弱児童、不良児童の取扱がさらに詳細に述べられており、「個性」(といってもタイプ分けにすぎないのだが)に適合する指導方法が示唆される。ここにおいて、マニュアルはもはや単なる表簿記入の手引きではなくなっている。また、東京市のマニュアル(東京市職業指導調査会1929、東京市役所1930)では、「性能診査法の発達とその必要」として読み物風の精神医学史概略、心理学史が書かれ、ビネーやソルン<sup>ママ</sup>ダイクの業績を紹介した上で、性能検査の価値、専門的素養を基礎とする個性観察の必要性が説かれている。マニュアルは、個性調査の正当性を示す役割さえ担うようになるのである。

## 6. モノとしての表簿

ここで再度表簿本体に目を向け、その物質的側面を観察したい。表簿の記入者は、単にマニュアルに従って書きこむのではなく、まずは端的にモノとしての表簿を眺め、例えば欄の面積によって書き入れる文字の大きさや分量を考慮するであろうし、同じ面積に記入するにも使用する筆記具によって条件が異なってくるだろう。表簿はそもそも、設計する段階で記入のあり方を想定してセルの配置、配分がなされるものである。とすれば、項目の変化や異同を読み取るだけでなく、教師が記入した一次史料だからこそ得られる情報に一層の注意を向ける必要があるだろう。

個性調査簿に限らず、日本の学校表簿は和紙と筆を用いることから始まった。当初は、縦罫線の入った和紙に教師が横線を引き、項目見出しを記入することから作業が開始された。図1のように、罫線用紙は文章表記にも用いることのできる汎用性の高いもので、袋とじ2つ折りの和紙

に手書きでタイトルを入れ、その行を除き横罫を引いてから墨書されている。生徒姓名欄の高さが上の5項目の高さに対し2倍強になっているのは、けして偶然ではないだろう。姓名は圧倒的に4文字か5文字が多く、それに対して項目に書き入れる文字数はほとんどが「勤勉」「緻密」「健康」などの2文字である。4文字以上を書き入れる場合は2列にして細かい文字で書かれているが、これは例外的な扱いである。つまり、この表簿は基本的に2文字の言葉を記入するための罫線を引いて使用されているのである。

次に、和紙袋とじながら予め縦横の罫が印刷され、項目見出しが印字された表簿が出現する。およそ1890年代のことである<sup>11</sup>。これにより、教師は罫線を引く必要も、新しい用紙になるたびにいちいち項目見出しを書く必要もなくなる。用紙の汎用性は失われ、当該表簿専用となる。そのため、およそ何人分を記入する必要があるか、どのくらいの期間で使い切るかを考えて発注する必要も生じるだろう。こうした用紙では教師の記述量が増える傾向が見受けられる。これは、項目名の活字の文字サイズに影響されているのか他に要因があるのか不明だが、筆文字を細かくして書き入れる文字数を増やす例が多く見られるようになる。

さらに、和紙から西洋紙へと変わると同時に筆からペンへと筆記具の変化が起こり、袋とじであったものが折る作業を省いて表裏1枚で2ページとなる。最も長い期間途切れずに一次史料を追うことのできる山形県の学校では、1915年に西洋紙とペンへの変化が起きている。ペン書きへの変更は、文字サイズの縮小化、同じ面積への記入に対して圧倒的な文字量の増加につながり、和紙袋とじから西洋紙両面印刷への変更は、加除や綴り順変更の便を助け<sup>12</sup>、促す。

縦横の罫線間を従来に比べて格段に細かくすることが可能になると、1ページの中に盛り込める情報量は飛躍的に増える。縦罫のみの用紙の場合、1ページ12行前後が標準であったのが、ほぼ同じサイズの内紙が縦横各30本以上の縦罫によって分割された表簿も現れた。あるいは、細かいセルと面積の広いセルが自由に組み合わせられ、配置された。この、罫線の自由度は、表簿記入に対する強力な規格化を推し進める。こうした、表簿のモノとしての変化は、タブローの空間設定に、ひいては書記行為に影響を与える。

フーコーは、規律・訓練上の書記行為について、「表記法や帳簿記入や書類の構成やページごとの段分けや図表化などのささやかな技術の決定的な重要性が生じ」たという（Foucault 訳書1977：193）。一次史料表簿は、前述の製紙や印刷技術等に支えられたモノとしての変化に加えて、ささやかな技術の変化がどのように起きたのかについても語っている。集合表として印刷された8番の表簿が、実践の中で累加個人表に転用されたことに象徴されるように、1900年前後から全学年にわたって累加記録する様式が1回記載、1年間記載の表簿にとって代わり始め、後者の表簿は1920年ごろまでに姿を消した。

さらにフーコーの視点を借りるならば、集合表は、「個人的なるものの最初の《定式化》」であったが、その諸要素の相関化や規格化が進むにつれて「個人別の既知事項が累積的な体系のなかへ統合される」（同：192-193）のであり、それが「ささやかな技術」を累加個人表へ向かわせる力として働いたと見るべきであろう。個性調査簿は、集合を一望することから、児童の個性の一望、なおかつ時間経過をも含めた一望へと欲望の対象を変えたのである<sup>13</sup>。そのため私たちは、100年前の一人の児童を個性調査簿の中に「ふたたび見つけ出しうる」（同：193）のみならず、その児童が6年間を通してどのように育ったかという物語さえ見出すのである。

## 7. 記述の様態

一次史料でなければ得られない情報、しかも表簿綴りの全体像を見ることで把握できるのが、記述の様態である。教師の記述は、ここまで述べてきたようにマニュアルによっても、表簿のモノとして側面によっても規定されるが、だからといって同じ様式とマニュアルであれば記述の様態も同じというわけではない。その差異は、教師の「個性」にもよるだろうが、それだけに還元することもまた現実的ではない。というのも、これらの表簿は「職員外ノ人ニハ見セシムベカラズ」と定められており、逆にいえば職員間では共有されたということなのである。これらの表簿は校長の検印を必要としたり、査定会議への提出が求められたりした。しかも、累加記録であれば担当が交代した後も引き次いで記入される。そのため、校内では記述のあり方にも教員相互の目が意識されたと思われる。

さて、一覧表番号の若い表簿のセルは、原則として漢字二文字の単語で埋められている（例えば図1）。これらの表簿に独自のマニュアルは綴じこまれていないが、参照されたと思われるのは『改正教授術』続編巻二（若林・白井 1884：7）の「性質品評表」の例である。この各セルには、例えば「鄭重」「朴直」「強健」のような漢字二文字が記入されるのが基本で、例外としては次の3パターンがある。第1は「温良ニシテ鋭敏」のように二語をつなぐ形、第2は頻度や程度、条件を付加するもので「時ニ違フ」「稍弱」「少シク敏捷」「意ニ適ハザレバ遵ハズ」のような形、第3は動詞を含む「人ニ狎ル」「能ク守ル」のような形であり、2番目と3番目は複合的に使われることも多い。

一次史料の記述も基本は同じだが、他の例も頻繁に見られる。「不規律」「不活発」など「不」をつけて反転させる形、二語以上を使用する際に接続せず語を並べるだけの形、順接「ニシテ」ではなく逆接「ナレトモ」を使う形である。また、形容詞や助動詞を使う叙述型「思考深シ」「音調低シ」「弁論巧ナリ」などもある。一次史料の傾向としては、1900年代に入ってから二語以上を接続した形や叙述型の記述の増加が観察される。

同一校の表簿である3, 6, 8, 18番は、一時的に集合表を個人表に転用しているが、一貫して縦1列に1児童1回分、6項目程度を記入する様式で、各セルの面積に大きな差はない。だが、年代が下るほどセルに記入された文字数が増えている。筆記具は筆のままだが、文字は細くなり、3行以上にわたって窮屈に文字が詰め込まれたセルが散見されるようになる。特に、「性行（性質）」欄が顕著で、次いで「知能」「言語」の欄も詳しく具体的に記述される傾向が見られる。二文字の単語による記入は珍しくなり、「正直ナレトモ稍放縦ニシテ執拗」のように三語をつないだ叙述や、「数理ノ理解力欠乏他ハ尋常ナリ」「注意散漫ナルハ肉体ノ状況ヲ原因トスヘキカ、好争」など、具体的な記述、推論も含めた記述が増えてくるのである。

「元来此の種類の表簿中には、家庭の状況、予備教育の模様、身体具合、気質の如何、知情意発達の状態、其の他当該児童の特徴等、苟も其の児童に関する条件は、悉く之を蒐集すべきもの」（板垣1903：p.47）といった主張がなされ、新たな表簿様式が次々に提案される中で、従来からの様式を使い続けている学校の中でも、1項目に1個の単語を当てはめて児童を査定するのではなく、より詳細な記述で児童の姿を記録しようとする実践が進んでいたと見てよいだろう。

1900年代には、当初から文章を記入することを想定したセル、すなわち自由記述欄も現れた。例えば、11, 12番の「臨時善行（悪行）発見」「操行略歴」は例示された言葉で書くことはできず、

縦長の欄を設けて文章を記入する。16番の「助長（矯正）スヘキ事項」も同様であり、25番に至っては1学年分の記入欄の幅が3.3cm、「奨励矯正ノ方法及効果」欄の高さは6.0cm、それ以外の5項目の高さは各3.4cmとなっており、ほぼすべての記述が文章となっている。

前述のように、集合表においても年代とともに記述が詳細になる傾向はあったが、当初から自由記述を想定した表簿の成立は、個人表への移行と関連が深いと思われる。また、累加表へ移行したことで、「全（上）」「々」と記入されたセルも目立つようになる。そのため、表簿には詳しい自由記述と最も簡略化した記述とが混在するようになった。

その自由記述欄においては、教師の感情が読みこめるような記述に出会うことが珍しくない。

助長スヘキ事項：以下記事（引用者注：矯正スヘキ事項の記載）ノ通り永続ヲ希フモノ也サレド考フルニ余リ少年トシテ真面目過ギハセザル乎本生ノタメニ杞憂ス後担任者如何トナス。矯正スヘキ事項：性温和直実ニシテ克ク勉強シ、成績又秀群本学年模範生也余担任シテ以来品行学業其他ニツキ訓戒シタルコトナシ余屢ハ模範生タルコトヲ級中ニ申告シ他ヲ奨励ス（16番様式、1908年度第3学年）

備考：劣等生中ノ劣等生ニシテ殆ンド白痴ニ近シ、記憶力ハ少シモナシ、当然未修了トナルモノナレ共彼レニ対シ殆ンド教育ノ効果ナク一方家庭ノ事情ヲ考ヘ校長ノ認可ニヨリテ修了ト認定ス（23番様式、1916年度第5学年）

このように長い記述ではなくとも、「イヤミナル児童ナリ」（25番様式、1916年度第2学年）、「シッカリシタ女子」（同1920年度第6学年）のように素直な記述にも出会う。これら、マニュアルが想定していない記述には、調査する教師というより、日常生活者としての感情が顔をのぞかせている。

では、自由記述の登場以降、記述は詳しくなる一方だったのかというと、実際にはそうとは言えない。ここでも教師の「個性」によって記述の密度に大きな差があり、特に面積の広い自由記述欄ほど差が目立つ。また、マニュアルが肥大化する傾向にあったのに反し、記述はむしろ簡潔になるケースも散見される。とりわけ個性調査訓令後は項目が細分化され、マニュアルは目を通すだけでも時間がかかるほど膨大になるが、記入方法としては数字や○を書き入れる欄を多く備える表簿様式や、細かく仕切られたセルの中に二文字の単語を記入する様式に戻る傾向も見られ、マニュアルの膨大さと表簿記述の簡便さとのずれが感じられる。こうした簡便な記述を可能とする表簿によって、最大限の項目数と最小限の労力の両立が目指されていたのだろうか。いずれにせよ、簡便な記述方式の採用によって教師による記述の様態のばらつきは最低限に抑えられ、個性調査簿は再び査定のための表簿の様相を呈してくるのである。

## 8. 終わりに

本稿では、明治期から昭和初期にかけて作成、記入されていた児童の個人性を記録した表簿一次史料の検討を通して、日本の学校教育の中で「個性」がどのようにして見出され、理解されてきたのかを考察してきた。

価値的意味を含まない差異であった「個性」は、教育実践の場に登場する際にすでに存在した

解釈枠組みに合わせる形で理解されたと考えられる。「個性」概念が導入される以前に、学校では品行性質の査定、人物査定、性質品評表などの表簿の記入実践が先行していた。その実践の中に、「個性」は「精密ナル注意ト永久ナル観察トヲ以テ之ニ臨マザレバ、決シテ正確ナル監査ヲ遂グベカラズ、従ツテ児童ノ個性ニ対スル処置、亦其ノ当ヲ得難シ」（岡本1896, p.341）といった言説とともに現れた。つまり、個性に対する処置は精密で永続的な観察と監査を前提としていたが、実際の観察と監査には、教師が従来からなじんでいた性質品評や操行査定の項目が多く流用されたのである。「個性」は、「性行」や「操行」に接ぎ木される形で実践的に理解されるようになったといえよう。査定、評価という価値判断の網の目に入ることで、個性は教育の中に根を張ることができたのである。

個性調査簿には、家庭の状況、予備教育の模様をはじめ児童の個性に影響を及ぼすべき事項、児童に関する条件は悉く調査収集して記入することが奨励された。個性調査簿に記入すべき情報は、家庭調査票や教師の家庭訪問によって集められ、身上調査書にも似た部外秘の表簿として記録実践が行われていたのである。

この個性調査簿一次史料は、これまでの研究がほとんど言及しておらず、あるいは「発見」されてこなかったものである。われわれ共同研究チームが収集してきた一次史料データは膨大な蓄積となってきたが、その活用が今後の課題となる。

最後に、一次史料表簿を読み解く可能性の一端について述べておきたい。例えば、1900年代になって「〇〇力」（記憶力、観察力、思考力など）の語が多く見られ、1910年前後になると「群集心理ニ左右セラレテ」「母親神経ニテ子ヲ愛シ過グ」といった記載が目につく。こうした記述からは、新たに登場した心理学用語やその捉え方の教育現場への浸透を見ることも可能だろう。また、家庭の方針や保護者の希望が記述されている表簿からは、家庭教育の状況や家庭が学校に寄せていた期待を読み取ることもできる。一例を挙げるなら、「小学教育ヲ了ルマデハ万事拘束ヲ加フルコトナクカメテ放任ノ主義ヲトリソノ個性ノ発達ヲ完カラシムルヲ期セリ」（24番様式、1915年度高等科第2学年）というのは、中学校教員である保護者が家庭調査票に記入し、個性調査簿に転記された「家庭の方針」である。こうした記述を他の項目との関連をも考慮して丹念に読み取るならば、近代学校の内実を一層立体的に浮かび上がらせることができよう。表簿はさらに、成績や身体に関する情報をはじめとして数量的な読解に開かれた豊かな史料でもあり、質的量的の両面から読み解くことで新たな可能性を探りたい。

\* 本稿は、平成25年度～29年度科学研究費補助金基盤研究（B）「学校的社会化の現代的課題に関する総合的研究：〈子ども理解〉の制度化に着目して」（研究代表者：北澤毅、研究課題番号：25285238）による研究成果の一部である。

#### 註

- 1 名称は「個性調査簿」に統一されていたわけではなく、「個性観察（指導）票」「（児童）訓練簿」など、他の名称がつけられた表簿が存在する。
- 2 学制では、小学から大学までの学ぶ者すべてを「生徒」と称した。小学校で学ぶ者について「児童」を使い始めるのは、1879（M12）年の「教育令」においてであるが、一次史料の中で「生徒」から「児

童」へと名称が変化し始めるのは1900年前後のことである。

- 3 片桐（1995）は、主たる教育雑誌に「個性」という語を標題にもつ記事が現れた早い例として1895（M28）年の『大日本教育会雑誌』に掲載された長谷川乙彦「個性と教育」を挙げ、「個性」がヘルバルト教育学の文脈とは別の文脈から登場したとしている。一方、鵜殿（2001）は、1889（M22）年に国府寺新作が「個性」を使用していることから、心理学では片桐が示したより早い時期から使用されていたとし、教育学説の中で大量に使用され始めたのは1892～1893（M25～26）年にヘルバルト主義学説が翻訳されて以降だとした。鵜殿は片桐とは逆に、「個性」概念を導入したのは、まさに明治期ヘルバルト主義だと論じたのである。これを受けて、片桐（2006）は、国府寺新作訳『魯氏教育学』（1887）の「個性」の用例を検討し、「否定すべきだが否定できないものとして、どちらかといえば消極的な意味で使われ」ていたこと、明治20年代半ばになっても「個性」は教育学用語として定着したとは言えないことを明らかにした。
- 4 史料の収集は2008年から開始し、科学研究費補助金基盤研究「問題行動・指導・評価をめぐる歴史・社会学的研究：子どもへの〈まなざし〉に着目して」（平成19～21年度）、「学校的社会化の現状と歴史に関する研究：〈児童の成立〉の解明に向けて」（平成22～24年度）の共同研究チーム（いずれも研究代表者北澤毅）により調査を継続実施してきた。
- 5 このほかに、学校日誌、試験成績票、卒業生台帳、勤惰表など極めて多様な文書を収集している。
- 6 学籍簿「十号表ノ様式」（1900）には、氏名、生年月日、住所、入学年月日、入学前ノ略歴、卒業年月日、退学年月日、退学ノ理由、保護者氏名、住所、職業、児童トノ関係、学業成績（学年ごと各科目、操行、終了ノ年月日）、在学中出席及欠席（出席日数、欠席日数＝病氣、事故）、身体ノ状況（胸囲＝常時、盈虚の差、脊柱、体格、眼疾、耳疾、齒牙、疾病）、備考欄が備えられている。
- 7 表簿は、所蔵館・学校の許可を得て、原則としてすべてのページをデジタルカメラで撮影しており、画像データの管理と個人情報保護を徹底している。
- 8 これ以前に、1891（M24）年の「小学校教則大綱」（文部省令第十一号）においても平素の行状学業を斟酌して卒業認定を行うよう指示されたが、この趣旨が徹底されたのが1900年の小学校令施行規則第二十三条である。
- 9 『個性調査法』（東京市職業指導調査会1929）は高等小学校用の手引き、『個性調査表記入手引』（東京市役所1930）は尋常小学校用である。
- 10 監獄行政の近代化を推し進めた小河滋二郎は、救済保護を要する個人について、その現象の由来する所以を調べ、その個性的関係に適應する措置を講ずる必要を説いた。それは、「恰も或る疾病を治療するに、先ず当該病者の個性関係を色々の方面から精診詳察することに由て、其の病原を探求するの必要あるが如」きことなのであった（小河 1914：2）。このように、犯罪や貧困への対策の中でも「個性」を調査することの重要性が主張されていた。
- 11 1881（M14）年4月30日付文部省達第十号府県達「学事表簿取調心得」に示された「第一式甲生徒学籍簿」は、より早い時期に細かい罫線で仕切られていた。
- 12 在学期間を通しての累加記録表を学級ごとに綴る場合、編成替えのたびに綴り替えなくてはならない。また、死亡を含む退学や転出も多いため、そうした児童の表簿を綴りの後ろにまわすなどしていた。そもそも、集合表では原則として綴り替えの必要がなく、個人表となったことで綴り替えを行うという発想が生じた（あるいは、順序の入れ替えを行う必要が生じたために個人表となった）という関係があったと考えられる。
- 13 細かく見れば、累加個人表の中でも、項目を重視したまともりから、時間（学年）を重視したまともりへの変化が読み取れる。

#### 【参考文献】

- 有本真紀 2012 「明治期学校表簿にみる児童理解実践—『個性調査簿』の成立過程」『立教大学教育学科研究年報』第55号, pp.5-26.
- 有本真紀 2014 「日本近代における〈家庭の学校化〉Ⅰ 家庭の管理装置としての学校教育—明治期・大正期における『学校と家庭との連絡』」『立教大学教育学科研究年報』第57号, pp.5-26.
- 池上誠 1905 「小学校初学年に於ける教授の実際」『日本之小学教師』74, pp.23-26.
- 板垣源次郎 1903 「児童訓練の方法」『日本之小学教師』第49号, 1903.1, pp.46-50.
- 伊藤弘一編 1906 『教育学大綱』大日本図書.

- 稲葉浩一 2013 「記録される『個性』—言説・解釈実践としての児童理解の分析」『教育社会学研究』第93集, pp.91-115.
- 鵜殿篤 2001 「『教育的』及び『個性』—教育学用語としての成立」『研究室紀要』第27号, 東京大学大学院教育学研究科教育学研究室, pp.15-24.
- 岡本常次郎 1896, 『単級学校ノ教授ト管理』金港堂.
- 小河滋二郎 1914 「医家と社会事業との關係に就て」『救済研究』第2巻3号, pp.1-16.
- 片桐芳雄 1995, 「日本における『個性』と教育・素描—その登場から現在に至る」森田尚人・藤田英典他編『個性という幻想』(教育学年報4) 世織書房, pp.53-84.
- 片桐芳雄 2006, 「近代日本における『個性』の登場—『個性』の初出を求めて」『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』第12号, pp.15-29.
- 河野誠哉 2003, 「個性の生産」森重雄・田中智志編『〈近代教育〉の社会理論』勁草書房, pp.53-92.
- 佐藤学 1995 「『個性化』幻想の成立—国民国家の教育言説」森田尚人・藤田英典他編『個性という幻想』(教育学年報4) 世織書房, pp.25-51.
- 東京市職業指導調査会 1929 『個性調査法』東京市役所.
- 東京市役所 1930 『個性調査表記入手引』東京市役所.
- 根岸貫 1902 『小学校実験管理談』東洋社.
- 広田照幸 2001 『教育言説の歴史社会学』名古屋大学出版会.
- Foucault, M., 1975, *Surveiller et punir: Naissance de la prison*, Gallimard, (=1977, 田村俣訳『監獄の誕生』新潮社)
- 三沢糾 1910 『国民性と教育の方針』富山房.
- 水谷智彦 2014 「〈教育〉を志向する家族の形成—大正期茨城県水海道地域における『家庭調査』を手がかりに」『立教大学教育学科研究年報』第57号, pp.27-47.
- 三輪唯五郎 1900 「児童訓練上に於る賞罰の実効」『日本之小学教師』1-11, pp.55-65.
- 文部省普通学務局 1891 『学事法令説明書』文部省普通学務局.
- 山根俊喜 1995 「明治後期～大正初期における個性教育論の諸相」稲葉宏雄編『教育方法学の再構築』あゆみ出版, pp.196-222.
- 若林虎三郎・白井毅 1884 『改正教授術』続編卷二, 普及舎.